2009年2月17日

土地利用転換の現場から
～生物多様性と地元の伝統社会～

地球・人間環境フォーラム
満田　夏花（みつた・かんな）
mitsuta@gef.or.jp

Contents

- 開発と土地利用転換の現場から
  - インドネシア・西カリマンタン：アブラヤシ農園開発
  - マレーシア・サラワク：アブラヤシ、パルプ用造林
  - ブラジル：サトウキビ、大豆
  - ベトナム：ダム開発
  - ニューカレドニア：ニッケル鉱山開発
- 地元の人々の生活・伝統・文化と生物多様性

開発と土地利用転換の現場から①
インドネシア：西カリマンタンのプランテーション開発

2008年11月調査*より

*地球・人間環境フォーラム、バイオマス産業社会ネットワーク、FoE Japanによる共同調査

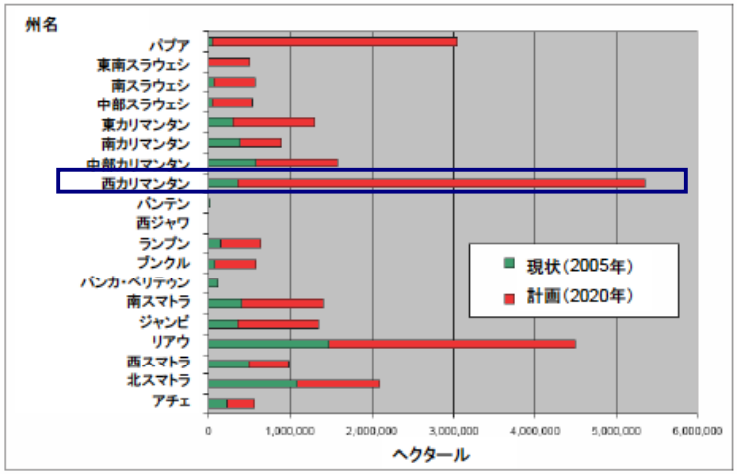
インドネシアのアブラヤシ農園開発

- 1990年110万ha
  →2005年には500万ha以上？
- 今後の開発割り当て地は計2,000万ha（注1）
- 1999年までに造成されたアブラヤシ農園の少なくとも7割が森林を伐採したもの
- 課題の多い「転換林」の決定プロセス
  「転換林」：農地転換が可能な「森林」
  2000年には800万ha、2002年には1,400万haに（注2）。2003年から2006年までの間、10,581haもの森林が転換林に（注3）。パプア、マルクの貴重な原生林も含まれる。

注1）Colchester (2006)、注2）Casson(2003)、注3）地球・人間環境フォーラム（2008）

インドネシアのアブラヤシ農園拡大計画

追加的な土地割り当て：2,000万haにもおよぶ



出典：Sawit Watch、Forest People Programme (2006) "*Promised Land: Palm Oil and Land Acquisition in Indonesia – Implication for Local Communities and Indigenous Peoples*"

西カリマンタン　ジャンティン村

- 2008年初頭にシナルマス・グループ（＊）によるプランテーション開発
- 土地面積は合計16,000ha
- 土地を提供すれば、事業収益の2割は村へ
- しかし村は強固に反対
- 企業側はすでに土地を造成し、事業を開始
- 隣村のスムンティック村は事業に賛成。企業が造成した土地の帰属をめぐり、紛争が発生

※インドネシア最大手のコングロマリット。「製紙・紙パ」「農業・食品」「不動産」「金融」など。

反対の理由

ジャンティン村の場合

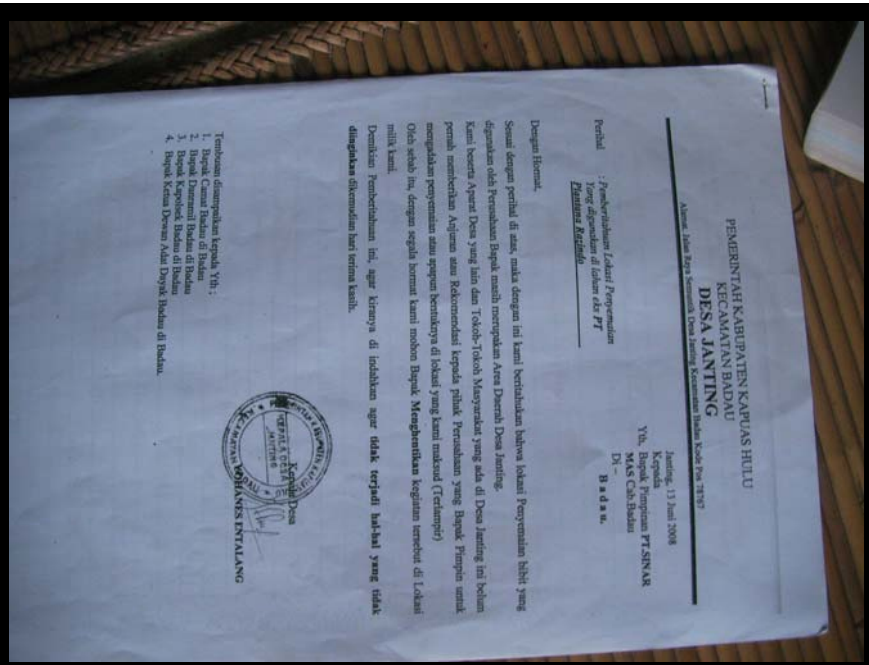
- 「なぜ反対するかって？　1つ目は土地だ。もしアブラヤシ農園ができたら村人の農地が無くなる。村の生活は農業に頼っている。農地がなくてどうやって農業をすれば良いのか」
- 「次は森だ。森は子孫に受け継がねばならない。森がなくなれば色々な問題が発生する。農地、森、これらを考えれば考えるまでもないだろう」
- 「プランテーションが来るまで、こんな問題はなかった。隣村とも、仲良くやってきた 。しかし、自分たちの土地が切り開かれることを見過ごしにはできない。」

（ジャンティン村元村長のマランさん）

2008年11月聴き取りによる

インタビューに答えるロングハウスのリーダーたち

住民の反対にもかかわらず、造成された土地。



PEMERINTAH KABUPATEN KAPUAS HULU
KECAMATAN BADAU
DESA JANTING

Alamat: Jalan Raya Semuanlik Desa Janting Kecamatan Badau Kode Pos 78767

Janting, 13 Juni 2008
Kepada
Yth. Bapak Pimpinan PT.SINAR
MAS Cab.Badau
Di –
Badau.

Perihal : *Pemberitahuan Lokasi Penyemaian Yang digunakan di lahan eks PT Plantana Rajindo*

Dengan Hormat,

Sesuai dengan perihal di atas, maka dengan ini kami beritahukan bahwa lokasi Penyemaian bibit yang digunakan oleh Perusahaan Bapak masih merupakan Area Daerah Desa Janting.

Kami beserta Aparat Desa yang lain dan Tokoh-Tokoh Masyarakat yang ada di Desa Janting ini belum pernah memberikan Anjuran atau Rekomendasi kepada pihak Perusahaan yang Bapak Pimpin untuk mengadakan penyemaian atau apapun bentuknya di lokasi yang kami maksud (Terlampir)

Oleh sebab itu, dengan segala hormat kami mohon Bapak **Menghentikan** kegiatan tersebut di Lokasi milik kami.

Demikian Pemberitahuan ini, agar kiranya di indahkan agar **tidak terjadi hal-hal yang tidak diinginkan** dikemudian hari terima kasih.

Kepala Desa
JANTING
DOHANES ENTALANG

Tembusan disampaikan kepada Yth :
1. Bapak Camat Badau di Badau
2. Bapak Danramil Badau di Badau
3. Bapak Kapolsek Badau di Badau
4. Bapak Ketua Dewan Adat Dayak Badau di Badau.

住民が出した抗議レター

反対の理由

プリン・クリチャナ村の場合

- 「農園は大面積を必要とする。私たちが持っている野菜のための土地、焼畑のための土地、陸稲のための土地、ゴム林、共有林を手放すわけにはいかない。」
（ロングハウスのリーダー、プリムス・ジュナウさん）
- 「森が失われれば、食糧の確保や生活の基盤だけではなく、森とともに育まれてきた村の文化も失われてしまう。これは、金を積んでも代替できるものではない」
（先住民族出身のロベルト神父）

2008年11月聴き取りによる

12

共有林で果樹を収穫↑

ラタンであまれたかごとドリアン↑

食事には、森林からの幸もならぶ

本当に「貧困」か？

プリン・クリチャナ村の場合

「政府や企業は、アブラヤシ農園開発は貧困削減になると言うが、間違えてはいけない。人々は貧しくない。森はいろいろな恵みを提供する。それを奪おうとすることは間違いだ」

（先住民族出身のロベルト神父）

泥炭地の転換

西カリマンタンの泥炭地でのプランテーション開発（2008年11月撮影）

泥炭地＝水に浸かった条件により植物遺骸の分解を遅れ、植物遺骸が有機質土（泥炭土）を形成したもの。

地球全体で泥炭地は2000GtCO2を貯留

＝ 地上の炭素の30%に相当

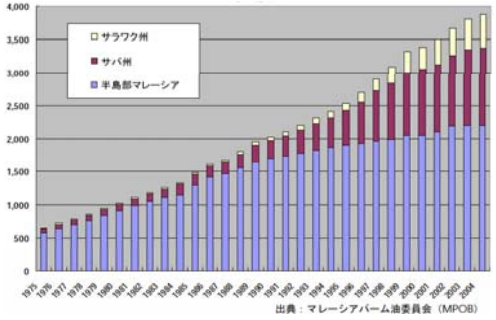
開発と土地利用転換の現場から②
マレーシア：サラワクのプランテーション開発

2009年2月調査より*

*地球・人間環境フォーラム、FoE Japanによる共同調査

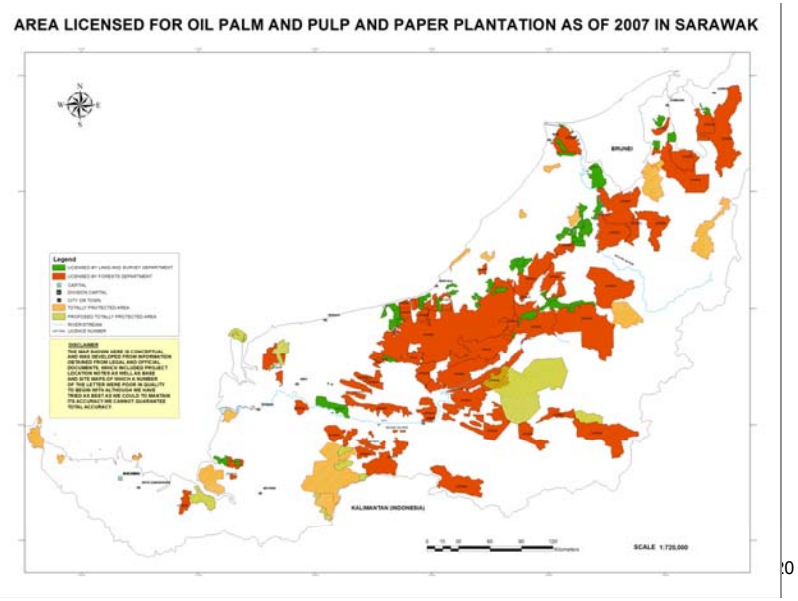
マレーシアにおけるアブラヤシ農園開発

- 1.9百万ha（1990年）→約4百万ha（2005年）
  約2百万haの増加
  - ゴム、ココア、ココナッツなどの用地の同時期の減少：1.1百万ha
  - 同時期の天然林の減少：91万ha
  - サラワク：2010年までに100万haを超える農園開発

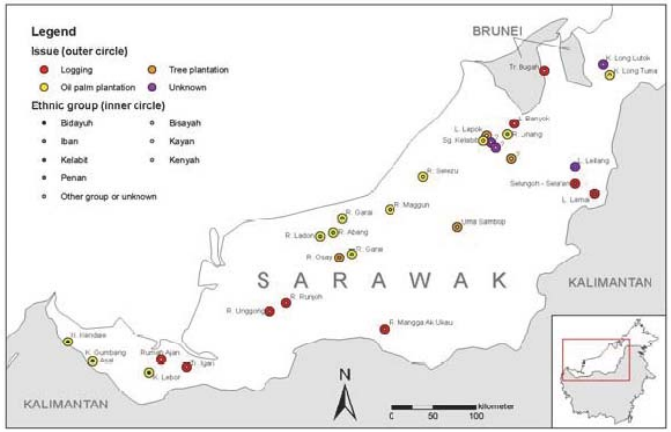


マレーシアパーム油委員会、FoE-Malaysia、FAO

サラワクにおけるアブラヤシ農園とパルプ用造林



サラワクにおける先住慣習地をめぐる係争



注）実際にはこの3倍の数の係争が生じている。現在、係争事例はサラワク全土で約150 件にもおよぶ。

Marcus Colchester, Wee Aik Png, Wong Meng Chuo and Thomas Jalong (2007), "*Land is Life: Land Rights and Oil Palm Development in Sarawak*", Forest Peoples Programme and Perkumpulan Sawit Watch

サラワク州ビントゥル近郊

- 周辺は熱帯木材の伐採がひと段落した、すでに劣化、した森林。原生林の面影を残す森林の断片。
- Planted Forest Pulp & Paperのアカシア植林事業
  - もともとAPP社の現地法人Borneo Paper & Pulp社→撤退
  - 中国向けのパルプ供給をにらむ。日本企業も販売権取得に名乗り？
- アブラヤシ農園開発も進行
- 予定面積15万ha。うち8万haが実施ずみ
- 250の村が存在
- 「先住民族のNCR（慣習的な土地の権利）の尊重※」は形骸化？

（※サラワク州法により、先住民族が伝統的に利用してきたNCRの開発にあたっては、先住民族の合意が必要とされている）

↑Planted Forest Pulp&Paperの看板

アカシアの一斉造林↑　2009年2月撮影

切り開かれ、アブラヤシが植えられた土地

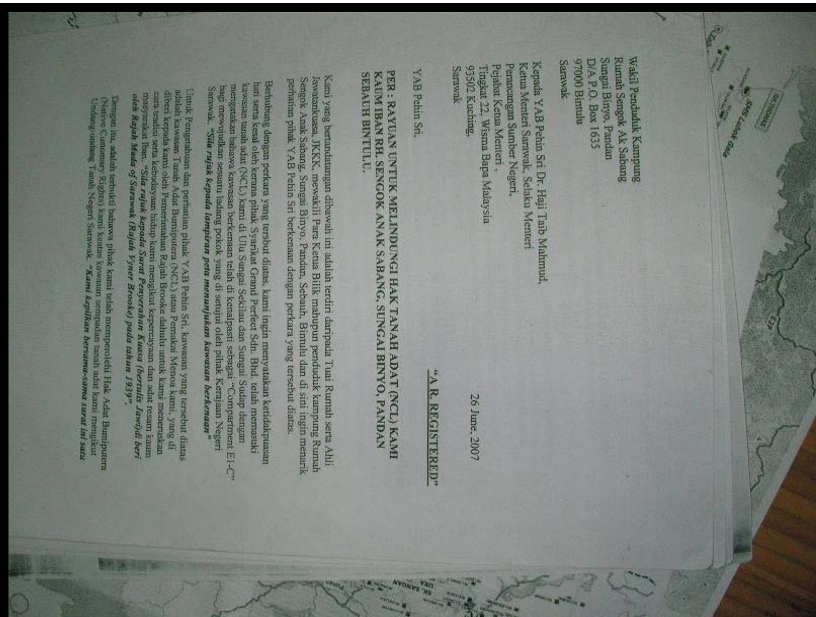
切り開かれ、アブラヤシが植えられた土地

反対を続ける先住民族

Sengok地域の場合

- 自分たちの先住慣習地（NCR）は計5,000ha。このなかに6つのロングハウス、約1,000人が居住。自分たちは昔からここに住んできた。証拠文書もある。
- 企業はいろいろなオファーをしたが、自分たちの昔からの土地と暮らしが重要であるため、断った。
- 2008年9月、NCRのうち300haの伐採が開始された。
- 州知事、警察、土地調査局に訴えたが対応されなかった。
- 企業は、我々が違法に居住していると言い、ここは企業の土地であるとしている。NGOの支援のもとに、GPSを用いて自分たちの慣習地の地図を作成した。27

2009年2月聴き取りによる



先住民族のロングハウスの委員会から州知事あての請願書。
このほかに警察、土地調査局などにも請願。

↑取り壊された建物の記録

“移転”のもつ意味

Samarakan地域のロングハウスの場合

- 10年前にパルプ用植林事業のために移転。
- 移転前の場所には、ずっと昔から住んでいた。先住慣習用地の中で移動焼畑耕作を行っていた。この土地は、10ブキ（丘の意）程度か。移転後は1.2haを与えられた（法的権利はない）。
- そのほか、狩や漁業をしていた。今は、アカシア植林になり、鹿しかいない。
- 農地が非常に狭くなった。法的権利もない。
- 生活はすべてが変わった。移転した良かった唯一の点は、町へのアクセスがよくなったこと。

2009年2月聴き取りによる

30

インタビューに答えるロングハウスの住民たち

無人となった家

造成された土地。

河川沿いの様子　2009年2月撮影

開発と土地利用転換の現場から③
ベトナムのダム開発

32

水没地域。生産性豊かな河川沿いの沖積地

- ✓ 河川地域の水没
- ✓ 水没地域の生態系の消滅、集水域の立ち入りの禁止
- ✓ 移転
- ✓ 「移動焼畑耕作」文化の消滅
- ✓ 生物多様性の減少による生活の基盤の破壊

写真左：河川沿いの村。カトゥ族の伝統にのっとり、高床式の家が楕円形にならび、中央のスペースがコミュニケーションの場となる。

「以前は移動焼畑耕作に水田を組み合わせた農業をおこなっていた。家のまわりには豚、牛、鶏、アヒルを飼っていた。山には果樹があり、狩猟ができて、野菜も山菜も豊富で植えなくても自然に生えていた」

（移転住民へのインタビュー）

移転先

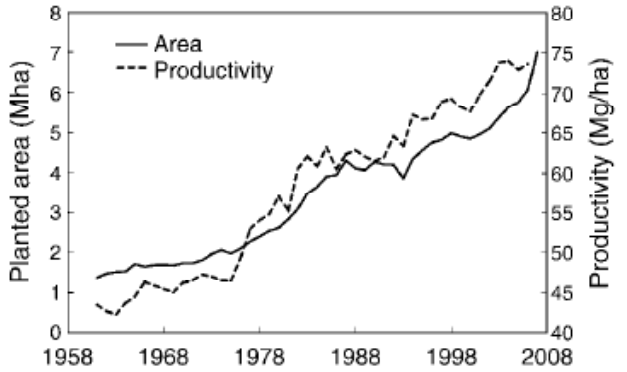
「移転により、私たちは道路、電力などのそろった“近代的な”生活を手に入れると説明された。実際に手にしたものは絶え間ない不安と生活の激変、不毛な農地であった 」

（移転住民へのインタビュー）

- ここに移転させられた移転住民は、その後、移転地を放棄したことが報じられた。
- この水力発電所事業には、日本の商社やメーカー、銀行も機材の輸出や事業への融資という形で関与している。

開発と土地利用転換の現場から④
ブラジルのアマゾンとセラード

ブラジルのサトウキビ農園開発



農地面積は急拡大。
中南部では牧草地からの転換も多い。

FIG. 1. Increase of planted area and productivity of sugar cane in Brazil from 1960 to 2007 (FAOSTAT 2007).

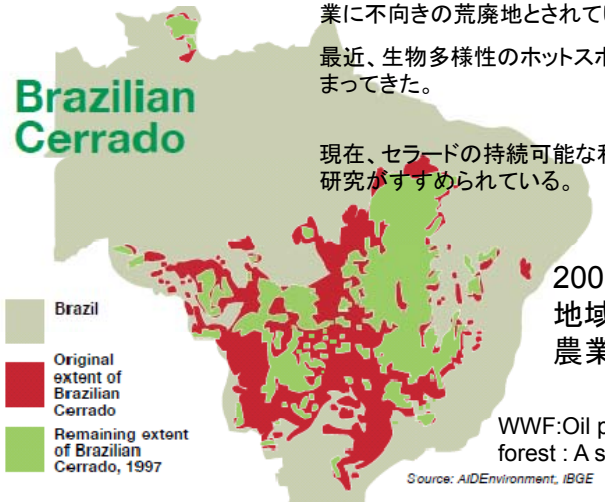
Luiz A.Martinelli and Solange Filoso(2008), *Expansion of Sugarcane Ethanol Production in Brazil: Environmental and Social Challenges,* Ecological Application, 18(4), p.886

セラードの農地転換

セラードとは「閉ざされた土地」の意。
ブラジル中部に広がる灌木草原地帯。もともと、農業に不向きの荒廃地とされていた。

最近、生物多様性のホットスポットとして注目が集まってきた。

現在、セラードの持続可能な利用についての政策研究がすすめられている。



2001年までにこの地域の約3分の2が農業に転換された

WWF:Oil palm, soy and tropical forest : A strategy for life

多様な生態系モザイク：セラード

（2008年10月撮影）

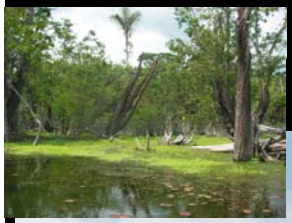
セラードの開発

（2008年10月撮影）

サトウキビ畑

（2008年10月撮影）

アマゾンと大豆畑



（2008年10月撮影）

地元の人々の土地の利用と

生物多様性

45

地域社会と生物多様性

- 生活・経済の基盤が生態系にある
  →生態系破壊による直接の被害
- 伝統的には、生態系を利用しつつ保全
- 生物多様性を利用する「伝統的知識」と文化：薬草、ツタ、樹液などの利用
- 植林事業、開発などによる土地の「囲い込み」
- 地域コミュニティと生態系の関係の変化→「自然の恵み」の位置づけの低下→持続的な利用のインセンティブの低下→文化・伝統の喪失へ

まとめ

- 「保護価値の高い」生態系の土地利用転換を回避すべき
  - 「保護価値の高い」の定義には、原生林や希少種、固有種などの生息地のほかに、地元社会にとって重要な生態系も含まれる。二次林すなわち保護価値がないということは間違い
- 社会参加のもとでのゾーニング／土地利用区分決定の必要性
  - 守るべき生態系、バッファーゾーン、利用しながら保全、開発などの区分は、地元住民も含むステークホルダー参加のもとに行うべき

47

引用・参照文献

- Casson, Anne (August 2003), "*Oil Palm, Soybeans & Critical Habitat Loss – A Review prepared for the WWF Forest Conversion Initiative*"
- Marcus Colchester, Norman Jiwan, Andiko, Martua Sirait, Asep Yunan Fidaus, A. Surambo, Herbert Pane (2006), "*Promised Land: Palm Oil and Land Acquisition in Indonesia – Implication for Local Communities and Indigenous Peoples*", Sawit Watch, Forest Peoples Programme
- Casson, Anne (August 2003), "*Oil Palm, Soybeans & Critical Habitat Loss – A Review prepared for the WWF Forest Conversion Initiative*"
- Marcus Colchester, Wee Aik Png, Wong Meng Chuo and Thomas Jalong (2007), "*Land is Life: Land Rights and Oil Palm Development in Sarawak*", Forest Peoples Programme and Perkumpulan Sawit Watch
- Luiz A.Martinelli and Solange Filoso(2008), *Expansion of Sugarcane Ethanol Production in Brazil: Environmental and Social Challenges,* Ecological Application, 18(4)
- FAO（2007）, The State of Food and Agriculture
- Friends of the Earth International, October 2008, malaysian palm oil - green gold or green wash? a commentary on the sustainability claims of malaysia's palm oil lobby, with a special focus on the state of sarawak
- 地球・人間環境フォーラム（2008）「平成19年度　違法伐採による環境影響調査業務報告書（環境省事業）」
- 満田夏花（2008）「マレーシア・インドネシア：アブラヤシ農園の面積拡大のインパクト～熱帯林の減少と土地をめぐる紛争～」農業と環境　2008年4月号　Vol.74 No.3

48